

水の文化書誌 38

《石橋・眼鏡橋のある風景》

古賀邦雄さん

こがくにお
古賀河川図書館長
水・河川・湖沼関係文献研究会

1967年西南学院大学卒業。水資源開発公団(現・独立行政法人水資源機構)に入社。30年間にわたり水・河川・湖沼関係文献を収集。2001年退職し現在、日本河川協会、ふくおかの川と水の会に所属。2008年5月に収集した書籍を所蔵する「古賀河川図書館」を開設。
URL: <http://mymy.jp/koga/>
平成26年公益社団法人日本河川協会の河川功労者表彰を受賞。



イギリスの石橋

魔の橋、聖者の橋、橋上の礼拝堂、生命の橋、戦の橋、橋上パレード、平和の橋、屋根のある橋の章からなる。中世の橋は塔や礼拝堂をそなえている。それは便利さと橋のようなところは悪魔を追い払う効果があったという。ロチェスターの橋上礼拝堂、ヨークの橋上礼拝堂、ウエークフィールド橋上の聖マリア礼拝堂、ロザラム橋の礼拝堂を掲載、橋の入口には立派な城門を置いたところもあった。

同様に礼拝堂橋、戦橋、屋根つき橋に関する三谷謙之著『事典・イギリスの橋』(日外アソシエーツ2004)は、橋が登場する英文学の作品を網羅する。ディッケンズの『大いなる遺産』では、主人公のピップがテムズ川でボートの練習に励む場面、ロンドン橋の表現が出てくる。また、バック橋はイングランド南部に架かるバイブルック川に架かる15世紀の橋である。ワイルドの童話『幸福な王子』の中で、バック橋の下で、貧しくて住む家もない二人の男の子が空腹に耐えている描写がある。テムズ川はロンドンに全世界のあらゆる富が集まる所で、イギリスにとっては最も重要な河川である。小川和彦著『テムズ川橋ものがたり』(武蔵野書房2006)がある。

日本の石橋

ヨーロッパの石造アーチ橋と日本の眼鏡橋を論じた太田静六著『眼鏡橋―日本と西洋の古橋』(理工図書1980)は、実際に踏査して、写真集と実測図からなる最初の本格的な石橋の書である。中国の書『英伸三著『上海放生橋故事』(アタイジエースト2001)は、上海市青浦区朱家角鎮にある運河に架かるアーチ橋である。この橋は明の時代1571年に建設され、のち清の中期1814年に修復再建された。

フランスの石橋

小林一郎著『風景の中の橋―フランス石橋紀行』(福音館1998)で、著者はフランスでは橋といえば基本的には石

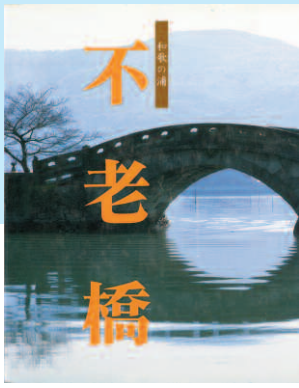
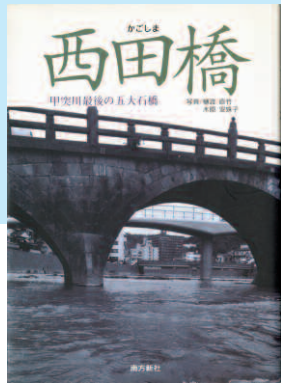
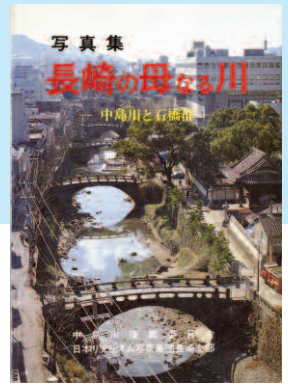
『哀愁』は、第一次世界大戦下、テムズ川にかかるウォータールー橋の高欄に寄りかかり、ロバート・テイラーの演じる将校が、ビビアン・リーが演じる踊り子レスターのことを想い出すシーンから始まる。悲恋物語であり、佐藤清著『橋との出会い』(朱鳥社2006)に描写されていた。
アーチ石橋の技術は、紀元前一世紀ごろローマに架けられたのが始まり

ヨーロッパの石橋

ヨーロッパの石橋を眺めると、アーチ石橋が映し出されることがある。

『哀愁』は、第一次世界大戦下、テムズ川にかかるウォータールー橋の高欄に寄りかかり、ロバート・テイラーの演じる将校が、ビビアン・リーが演じる踊り子レスターのことを想い出すシーンから始まる。悲恋物語であり、佐藤清著『橋との出会い』(朱鳥社2006)に描写されていた。
アーチ石橋の技術は、紀元前一世紀ごろローマに架けられたのが始まり

『哀愁』は、第一次世界大戦下、テムズ川にかかるウォータールー橋の高欄に寄りかかり、ロバート・テイラーの演じる将校が、ビビアン・リーが演じる踊り子レスターのことを想い出すシーンから始まる。悲恋物語であり、佐藤清著『橋との出会い』(朱鳥社2006)に描写されていた。
アーチ石橋の技術は、紀元前一世紀ごろローマに架けられたのが始まり



の種山に逃れ、農民となりながら、石橋架設の技法を習得。その技法は息子の三五郎に伝えられ、全国に拡がった。山口祐造、戸井田道三著『日本の石橋』(平凡社1996)は、天に架かる虹にも似た石造アーチ橋を、昭和32年の諫早水害によって復元した諫早眼鏡橋、現川の石橋群、霊台橋、沖繩の石橋を旅する。神晃弘写真、戸井田道三解説『眼鏡橋』(葦書房1993)は、九州の石橋群に加えて、島根五百羅漢橋、和歌山不老橋、京都円通橋、石川関月橋、東京常盤橋、福島松川橋、山形祝橋、堅盤橋を撮り、石橋の技法が東北まで拡がっていることがわかる。

また、前田正彦著・発行『眼鏡橋』(1992)は、全国の石橋を歩き、スケッチする。著者はそのまえがきで「構造的に言えば、眼鏡橋とはリング状に積み上げた石橋のことで、上部からの荷重を垂直方向の圧縮力としての石の接面に伝え、水平方向に広がる力とする力を相互の摩擦力によって抑え、橋の安定を保っている橋のことです。このためには、円周率 π 3.1415...の計算に基づいて、石の大きさ、形を決め、石を精密に削る必要があります」と述べている。

(1976)は、農民たちの年貢輸送の便宜のために架けられた豊岡橋、馬門橋、霊台橋などの熊本県の石橋物語、さらに永安橋、西田橋、高麗橋など主に薩摩藩が主導して造られた鹿児島県の石橋物語となっている。同『九州の石橋をたずねて(後編)』(1997)は、農民の年貢輸送のために庄屋たちが架設した岩戸橋、小月橋、千載橋などの大分県の石橋物語、終わりに宮崎県、佐賀県、沖縄県に関する石橋を丹念に綴っている。

口橋、栗林橋などを上流、下流から撮り、長さ、径間、石質、竣工日、石工名を丁寧に表示する。これらの石橋は、明治から大正期にかけて、橋本勘五郎が指導したものである。しかしながら、平成24年7月九州北部豪雨によって多くの橋が損傷した。

長崎・福岡の石橋

長崎の石橋については、片寄俊秀、村田明久編『長崎 中島川と石橋群』(観光資源保護財団1997)は、歴史的景観の保全とまちづくりの観点から、石橋の架設から町の変遷を環境の面から論ずる。昭和57年7月、長崎は大水害に遭遇し299人が亡くなった。中島川の石橋群も損傷した。その後復興は、中島川の兩岸に放水路が建設され、石橋群も復元された。中島川復興委員会 日本リアリズム写真集団長崎支部編・発行『写真集 長崎の母なる川—中島川と石橋群』(1983)がある。

大分の石橋は、既に述べたように、農民の年貢搬送の難儀に対し、庄屋たちが資金を集めて造ったものであり、耐久、耐重性に富む。岡崎文雄著『大分の石橋記念碑』(双林社1994)、大分の石橋を研究する会編・発行『おおいの石橋』(2000)、岡崎文雄、薬師寺義則著、高山淳吉写真『魅せられて里の石橋たち』(高山総合工業1993)、同『伝えたいふるさと石橋』(高山総合工業1996)がある。三光村泰源寺橋、本耶馬溪町耶馬溪橋、羅漢寺橋、院内町御香橋、別府市久保鶴橋、緒方町柚木寺原橋などを捉える。

熊本の石橋については、熊本日日新聞社編・発行『熊本の石橋313』(1998)で全体像を捉えている。個別적으로는、一村一博著『霊台橋』(熊日情報センター2011)、通潤橋について、笹原侘介著『自治の龜鑑為政之権化 布田保之助惟唯傳』(布田翁徳顕彰会1993)、矢部町通潤地区土地改良区編・発行『通潤橋架橋150周年記念誌』(2004)がある。さらに、本渡祇園橋と山口川の環境を守る会編・発行『国重文の祇園橋』(1998)は、わが国唯一の十連石桁橋である。

鹿児島島の石橋は、甲突川に江戸期に架けられた新上橋、西田橋、高麗橋、武之橋、玉江橋の五大石橋で、薩摩藩の命により、肥後の岩永三五郎が架けた。これらの石橋もまた、平成5年8月の鹿児島市を中心とした記録的な豪雨で損傷した。小説として、森光宏の『眼鏡橋 調所と三五郎』(東京図書出版2004)があり、樋渡直竹、木原安妹子著『かごしま西田橋 甲突川最後の五大石橋』(南方新社1995)、樋渡直竹著『石橋幻影 甲突川から消えた鹿児島五大石橋』(文化ジャーナル鹿児島社1996)、日本の宝・鹿児島島の石橋を考える全国連絡会議編『歴史的文化遺産が生きるまち—鹿児島・甲突川の石橋保存をめぐる』(東京堂出版1995)が刊行されている。その他の書として、北脇義友著『岡山の石橋』(日本文芸出版2007)、和歌浦を考える会編・発行『和歌の浦 不老橋』(1992)をあげる。

九州の石橋

石橋はほとんどが九州地方に存在する。山口祐造著『九州の石橋をたずねて(前篇)』(昭和堂印刷1974)によれば、長崎の中島川に架かる石橋群は、中国人や住民の寄付によって架けられた。同『九州の石橋をたずねて(中編)』

福岡の石橋は、筑後川水系小石原川の支川である野鳥川に架かる一連の石橋について、山口祐造著『秋月眼鏡橋物語』(秋月郷土館1979)にくわしい。長崎の石工たちによって文化7年(1810)に竣工した。馬場紘一著・発行『伝えたいふる里の石匠の技—福岡県南地方の石橋』(1996)は、主に矢部川の石橋、宮ヶ原橋、洗玉橋、寄

以上、石橋・眼鏡橋の書のみみてきた。集落の人々とその集落の川を利用し、みんなで守っていくような川を里川と呼ぶ。素朴な石橋は、里川に架かっていることが多く、里川と言え。石橋・眼鏡橋のある風景は、人々に安らぎを醸し出し、水の歴史と文化を生み出す原動力でもある。

〈備屋と月の出を待つ眼鏡橋〉(北園逸子)

